

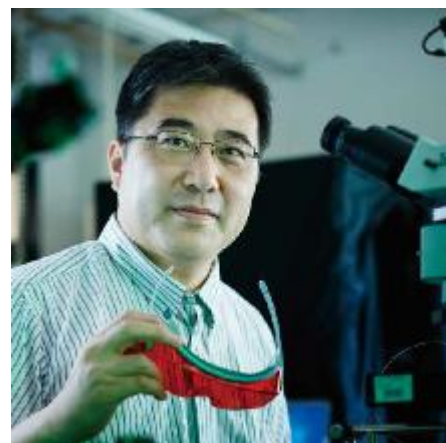
リレーメッセージ第9回

火原彰秀氏（北高 42 期/平成 3 年卒）

第 8 回の錦織功政氏（北高 39 期/昭和 63 年卒）からのご紹介です。

錦織功政氏よりバトンを受けました火原彰秀です。錦織氏には、松江から東京に出てすぐの時期、東京の Busy さに目を回している自分に、高校の先輩として優しく接して頂きました。今でも大変心強い先輩です。錦織氏の軽快なお話の次にやりにくくはあるのですが、高校・大学がらみのお話を考えました。

私は松江北高理数科を卒業後、25 年間の学生・大学教員生活を東京で過ごしました。2016 年途中から東北大学に移り、仙台生活も 5 年目に入ろうとしています。大学生の頃からずっと化学や科学計測の研究をしています。



2017 年 3 月に、北高時代に生物を習った泉雄二郎校長先生（当時）とお目にかかる機会があり、その御縁でその年 10 月の理数科関東研修にて理数科 2 年生 40 名弱にお話をする機会を頂きました。いい機会なので、少し自分を振り返りつつ、今の高校生・大学生に期待することを考えてみました。

私が松江北高を卒業した 1991 年 3 月は、まだバブル経済が終わっておりませんでした。社会が右肩上がりに拡張する空気を吸って高校生までを過ごしたと思います。情報環境としては、インターネット以前ですので、ある「情報環境中心軸」が存在する中で生活していた気がします。今思えば、楽観的・モノカルチャーな雰囲気です。

これに対して、現在高校を卒業する皆さんは、生まれてからずっと、経済的には大きな膨張のない安定した環境のなかで生きていて、我々とは違う空気を吸って生きているのだと思います。情報技術の発展が当たり前で、多種多様な溢れんばかりの情報のなかで生活しています。意見は分かれるところと思いますが、ある視点から見ると、安定した・マルチカルチャーな雰囲気、Developed Countryとしての日本の中で育った世代と言えるかと思います。

このような環境変化にあわせて、社会基盤としての教育モデルにも修正が必要と思いますが、この意識を広く共有することには大変な困難が伴うように思います。「大学秋入学・ギャップターム導入」などへの、教育界内外からの大きな反発は記憶に新しいところです。各学校・大学で多様な取り組みがなされてはいますが、現状では一人一人の生徒・学生（とその保護者）が、新時代に目を開いて学びに努めなければならない状況であると感じています。ある意味悲観的なお話ですが、目を開いて見回せばチャンスは昔より広がっている、というお話でもあるかと思います。

さて、理数科関東研修での講演ですが、自分の研究・キャリア・感じていることを交え、これから大学・社会に進む生徒さんに向けたメッセージとして、「理系の人生 ～大学教員あるいは個人の雑感～」というタイトルでお話しました。大学で学んでほしいことの第一は、教養を広める布石としての教養科目、専門性を高めて最前線に飛び出す準備としての専門科目などの「リテラシー」です。また、思慮深さと、協働・自律的活動・ツール／リソースの有効活用などを求められる、調査研究・ワークショップ型講義に代表される「コンピテンシー」関連の勉強をして欲しいことの一つです。これらの「能力」とともに、「環境選択」「自己管理」もキャリア上大事になることとお話ししました。これらのことを、「プロ・サッカー選手と理系研究者／技術者の類似性」に触れながら説明したところ、生徒たちから一定の理解が得られたと思います。とりわけ「パフォーマンス＝能力×コンディション」であることは、印象的な概念だったようです。高校生が聞いたことのないお話をしようと意図した通り、感想文からは多くの新鮮な驚きが読み取れました。時代は常に動いていますので、各自の学びやキャリアの中の「変わるべきでないもの」と「変わるべきもの」を考えるきっかけになったのであればよいな、と思います。

お堅い話になってしまいました。次のリレーメッセージは、理数科同期の吉田尚史氏にお願いしました。吉田氏は昔から同調圧力に影響されない自由な雰囲気身を身にとっていました。現在でもこの雰囲気を保っている貴重な友人だと思っています。ゆるいお話が頂けるのではないかと期待しています。